

詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

堤焼き眠れぬ夜となりけり

川越市 大野有之介

△評▽堤や野の枯れ草を焼き払うのは春の農作業準備のひとつ。いちにち火を扱ったあとにたかぶりを思わせる「眠れぬ夜」である。

茶屋の間を少女はぬり絵の雪

嘉麻市 堺 成美

△評▽何が行われているのかも分からない年齢であろう。ぬり絵にふける姿が悲しみをさそう。

門灯の点るよしだれ梅の中

町田市 枝澤 聖文

寛解やはばたけさうな春シヨール

加古川市 伏見 昌子

ほほほと笑みをこぼせる雛かな

米子市 岩水 節子

カフェのドアちりと鳴らし春の風

東京 永井 和子

ハンカチにふはりと包むふきのたう

鹿児島市 平川 玲子

しゃばん玉ひとつ大きくふくらます

川口市 高橋さだ子

ジョギングの足止めてきく初音かな

岡山市 仲野 恒彦

お持たせの重なることも桜餅

枚方市 門川 清秀

小川 軽舟 選

囀や朝日にかざし眼鏡拭く

吹田市 三島あきこ

△評▽昨日までの汚れを拭き、今日の新しい視界を得る。鳥のさえずりを聞きながら朝日にかざすのがすがすがしい。

絞り出すやうな海鳴東北忌

加古川市 伏見 昌子

△評▽海底から絞り出すようにして寄せる重い海鳴り。それを聞く作者の思いがこもる。

卒業や作業着の袖摩り切りし

防府市 篠原 智子

新しき家族のかたち鳥帰る

秋田市 鈴木華奈子

手回しの鉛筆削り沈丁花

小平市 岡崎よし子

早晩の葉師めくりや梅開く

津島市 浅井 厚視

まんさくの花上棟の紙垂立つる

東京 山本こうし

屈みをれば子の空広ししゃばん玉

浜松市 野畑 明子

ドリル持つ反射ベストに春の雪

郡山市 原田 尚知

黒く耀く花冷えの石器かな

新座市 伊藤 映雪

西村 和子 選

山彦は行つたり来たり木の根開く

青森市 小山内豊彦

△評▽「木の根開く」は雪国の木立に見られる春の兆し。待ちに待った春が来て、山びこたちの動きも活発になる童話的な句。

春昼や雀の遊ぶ弓道場

宮城 山田 庸備

△評▽弓道場に入影も弓矢の動きもないことが伝わる。のどかな眠くなるような春の真昼。

口跡の正しき人や梅真白

亀山市 藤原 紅

野火果てて野火の匂ひの水を飲む

加古川市 中村 立身

能登恋し羽昨の涙のさくら貝

鹿嶋市 津田 正義

指先は別の生きもの毛糸編む

西海市 まえだいっそう

城趾のかの紅梅の咲く頃か

我孫子市 桑原真喜子

探梅や礎の手摺に助けられ

和歌山 馬谷富貴子

春めくや買物忘れ立ち話

高知 渡辺 哲也

語りかけくる白梅の二三つ

姫路市 板谷 繁

井上 康明 選

なすな咲く訪問看護ステーション

兵庫 廣澤 真希

△評▽ナズナは、小さくかわいい野の花である。地域を支え、活発に活動する訪問看護ステーションに、寄り添うように咲いている。

をさな児の肩にもつむじ山笑ふ

東京 石川 黎

△評▽肩に小さな渦がある男の子は元気いっぱい。背景には、明るい春の山が座っている。

暖かや草食む牛の太き首

倉敷市 中路 修平

聞き合ふ流水夜を咆哮す

川越市 益子さとし

蛇穴を出て鴉と戦へり

長浜市 中島 正則

桜一片ほどの命や退院す

清瀬市 桃瀬菜美子

原子炉の先の滄海返る

佐世保市 相川 正敏

岩刻む梵字に春の光満つ

大阪 道畑日出子

啓蟄の通勤電車窓光る

岸和田市 掃部 敬治

はちきれんばかりの花の香かな

春日市 林田 久子

うたは奏でる

新しい世界

染野太朗

小原奈実歌集『声影記』を読んでいると、小原の言葉に導かれて、見慣れた世界がこれまでと違ふまたく新しいものとして感じられる瞬間が何度も訪れる。

・魚の瞳く水面の雨よしづけさへ逃げかへりゆくその背鰭みゆ

「魚」は「うお」、「水面」は「みなも」と読めばよいだろう。場面としては、池が何かの水面近くまで来ていた魚がまた水中へと泳いでいった、というだけなのだが、魚が擬人化され、また、聴覚にかかわる表現をまじえて描写がなされており、それがこの歌を個性的なものにしている。それによって私たちは水面を打つ雨の音や水中のしずけさに耳をすますようにこの一首を読むことになる。水面を離れ、あるいは深みへと沈んでいくその背びれの動きは、俗世の音を拒むように、静寂をまとっていかにも美しい。

・梨刺きて梨のかたちの刃の痕を空ひるき日の唇餉となせり

このむかれた梨は誰にとっても見覚えのあるものだろう。しかし作者はそのナイフの痕を「梨のかたちの刃の痕」と表現する。同じ梨を見ているはずなのに、梨ではなく刃とその痕のほうが目立って見えてくる。ほんのひと音が大きく作用し、だまし絵の背景に気づかされるような、視点のあざやかな転換がある。

2010年に角川短歌賞の次席となつて以来、決して多作ではないが、つねに注目されてきた作者。待望の第一歌集である。

・灯さずにある室内に雷させば雷が彫りたる一瞬の境

(そのめ・たろう「歌人」)